

## 小学校における紙上相談ピア・サポート実践の評価

戸田 有一 (大阪教育大学教育学部・学校教育講座)

西海 巡 (鳥取大学大学院教育学研究科・大学院生)

吉田ひろみ (鳥取大学教育地域科学部附属小学校・養護教諭)

本研究は、鳥取大学教育地域科学部附属小学校で実施されてきた紙上相談ピア・サポート実践に対する児童の評価を質問紙調査によって調べた結果を報告するものである。

この紙上相談ピア・サポートは、対コミュニティ返答相談として、ある学校にある時期に学ぶ子どもたちの問題を、ピア・サポーター役の子どもたちとともに考えて、子どもたち全体に返していこうとする実践である。その実践の効用を評価するために、鳥取大学教育地域科学部附属小学校4年生71人、5年生72人、6年生73人(全体で、216人。男子97人、女子119人)に質問紙調査を実施した。調査内容は、紙上相談の効用(相談者にとっての効用と読者全体にとっての効用) C-フレンズへの参加希望とその理由などである。

その結果、相談者にとっては、気持ちが楽になったり、また、結果的に問題の解決に結びついたこともあったりしたことが示されており、一定の効用はあったことがうかがえる。ただし、相談に応じてもらえていない、回答の内容が不十分である、あるいは解決してもらえていないという感想も寄せられており、改善の余地もあることがうかがえる。いやがらせの抑止効果も限定的ながら見られたが、活動内容に関する広報や相談システムをより充実させてから再度調査を行う必要があると考えられた。C-フレンズへの参加希望者の動機は、「返礼」「貢献」「自尊感情」という記述内容がよく見られたが、この動機と活動への関与とのかわりについては、今後のさらなる検討を要する。

上記の他にも、自由記述の分析などを行い、1)活動内容の広報、2)小学生の質問への中学生による回答、3)対個人返答相談による回答、4)相談提出の機会の保障、5)C-フレンズへのフィードバックに関する改善提案を行った。

《キーワード》ピア・サポート、紙上相談、実践評価、小学生

### 問題と目的

本論文では、多様なかたちで展開されているピア・サポート実践のうち、鳥取大学教育地域科学部附属小学校(以下、附小と略す)で行なわれているピア・サポート実践の評価をすることが目的である。

そこでまず、多様なピア・サポート実践について概観し、次に附小での実践が行なわれてきた経緯をごく簡単に述べ、そのうえでピア・サポート実践の評価研究をするうえでの留意点をまとめる。

#### 1. ピア・サポート実践の多様な展開

1980年代からの日本国内のいじめ問題への社会的関心の高まりと、いじめの実態などに関する研究の蓄積のうえに、近年では、いじめ対策としての実践と研究も、さまざまなかたちで取り組まれている。その一つとして、いじめ対策に留まらない実践として着目されているのが、ピア・サポートである。それは、広義には

「支援を受ける側と、年齢や社会的な条件が似通っている者(ピア・サポーター)による、社会的支援(ソーシャル・サポート)」(戸田, 2001)である。学校においては、この年齢の近さ(同輩としてのピア)を活かした活動が展開されていることが多い。

カナダや英国の実践に触発され、その日本国内における実践も、中学校(例えば、河田, 1999; 河田, 2000など)や小学校(例えば、松田, 2000)、そして高等学校(例えば、池本, 2001)や技能連携校(西海・戸田, 2002)で行われたものが報告されている。

実践の場だけではなく、その形態も多様で、社会的スキルのトレーニングに近い実践から、紙上相談あるいは面談での相談活動を含むものまでである。児童や生徒が仲間の相談にのる実践は、日本では金沢大学教育学部附属中学校(河田, 1999; 河田, 2000など)などにおいて展開されてきた。

#### 2. 紙上相談ピア・サポートの附小での実践

附小では、1999年度に、全国国立大学附属学校PTA連合会におけるスクールカウンセラーによる教育相談についての発表を受け、同じような取り組みを始めたいとの提案から、附小懇話会PTCC委員会が発足した。このPTCC委員会は、児童の心のケア（特に仲間関係上の問題や不登校傾向への対応）のために、保護者、教官、カウンセラー、子どもたち自身の連携でサポートしていく活動として、具体的な活動に着手していった。

2000年度にはメールや手紙による個人相談や6年生の有志児童（C-フレンズ、その後、5年生も加わっている）の紙上相談ピア・サポート活動が展開され、『小さなそうだん』の発行が始まった（吉田ひろみ・附属小学校PTCC委員会・戸田有一、2001）。2001年度1月からは、教育地域科学部家庭科教室の学生によるメンタル・フレンド活動とも統合的に行なわれている。

2002年度、大学側の支援を鳥取大学教育地域科学部附属教育実践総合センターが一元化し、PTCC委員会教育相談員を第2筆者が継承し、特に養護教諭（第3筆者）との連携のもとに運営している。そして、紙上相談ピア・サポート活動（C-フレンズによる活動）も、5・6年生有志による新規メンバーで再スタートし、1年が経過しようとしている（西海巡・吉田ひろみ・太田三葉子、2003）。

本研究において実践評価の対象となる紙上相談は、相談を寄せた児童のみに返答を返すかたち（これを、ここでは、対個人返答相談と呼ぶ）ではなく、相談のやりとりを学校全体に返すかたち（これを、ここでは、対コミュニティ返答相談と呼ぶ）で行っている（図1）。

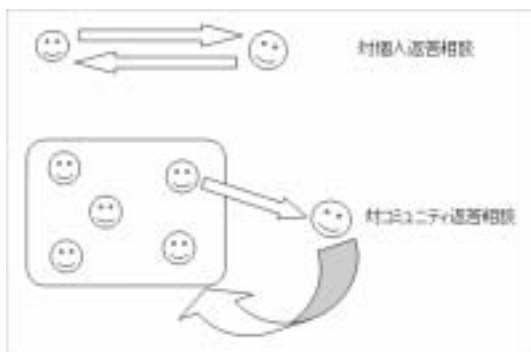


図1 対個人返答相談と対コミュニティ返答相談

対コミュニティ返答相談には、新聞というメディアの相談コーナーと共通するところと異なるところがある。

対コミュニティ返答相談も、新聞の相談コーナーも、悩みを寄せた相談者の他にも同様の悩みを抱えている読者がいることを想定している点が共通である。そして、そのような読者を代表しての質問と回答という位置づけゆえに、特定の個人に向けての回答ではあっても、ほぼ同じ悩みを持つ読者を想定しての回答であることが期待される。

対コミュニティ返答相談が、新聞の相談コーナーと異なるのは、その相談ごとにかかわる当事者が、自分たちの問題として読む確率が高いということである。それは、狭い意味では、たとえば、その相談がいじめ被害に関する場合、いじめに関与している者が、自分のかかった出来事として読む確率が高いということであり、そのような事態を想定しての返答が期待される。抑止効果がある場合もあろうし、「ちくり」と見なされて逆効果になる場合もあるからである。また、広い意味では、相談者と同じ学校に同じ時期に学び、同じような出来事を経験しているゆえに、その学校の児童全員が当事者とみなされる場合もあろう。

新聞での相談コーナーとは、このように読者層の特性が異なることから、対集団返答相談等の呼称を用いず、対コミュニティ返答相談という呼称を用いた。

### 3. 紙上相談ピア・サポート実践の評価

ピア・サポート実践の評価研究は現状ではまだまだ数少ない。また、実践の目標や手法も多様であるため、評価手法も多様である必要がある。そのことに留意し、先行研究を検討する。

英国においては、カウンセリング的なピア・サポートの実践についての評価の結果が報告されている（Naylor and Cowie, 1999）。ピア・サポーター用の質問紙、利用する一般生徒のための質問紙、実践の運用に関与している教師用の質問紙、関与していない教師用の質問紙を準備し、それぞれの立場からの評価を検討し、実践全体をさまざまな角度から評価している。本研究においては、調査の準備と実施上の制約から、児童対象の調査は実施したが、教師対象の調査は行うことができなかった。

池本（2001）は、高等学校におけるソーシャルスキルトレーニング的なピア・サポートのトレーニングに参加した生徒の参加前後の変化を検討しているが、全体を平均値でまとめて提

示するのではなく、個々の変化がわかるような結果の提示を行なっている。本研究でも、個々の回答を尊重するまとめ方を行なう。

#### 4. 本研究の課題

##### 1) 調査実施による直接的寄与

調査結果の集計を待たずとも、調査の実施そのものが実践へのなんらかの寄与になると考えた。

まず、調査の実施そのものがC-フレンズの活動の広報になる。つまり、アンケートの実施によって、C-フレンズが紙上相談を行っているということを、児童に伝える効果があると思われる。

また、相談に関する質問を行うことで、相談するということがひとつの選択肢であることを伝えることになる。特に相談の選択肢を示すこと(友だち、先生、家族)が、行き詰まっている子どもにとっての、相談への促しになる場合もあると考えられる。さらに、相談することが公に推奨されているニュアンスが、アンケート全体から感じられるように検討した。

##### 2) 調査実施による間接的寄与

まずは、この調査結果を検討することで、C-フレンズの相談システムの改良に資する情報を得られると思われる。たとえば、相談したいのに相談しなかった理由などのなかに、システムの改良へのヒントが含まれていると思われる。

もちろん、ピア・サポート実践は、友だち関係のなかで本来は解決できていたことができなくなっている現状への対策であるので、どのような状況を望ましいとするのかをあらかじめ記しておきたい。

・ピア・サポートへの相談が多いことが望ましいのではなく、相談窓口のひとつとして知られていれば十分と考える。

・また、全体のなかでピア・サポート実践を評価する人の割合を気にするのではなく、この相談システムを利用しようとした児童の個々の意見を尊重する。特に、否定的評価については、それが一つであっても、丁寧な検討を行なう。

##### 3) 本研究の観点

上記のような寄与を行うために、まず、紙上相談の効用について調べる。これは、相談者にとっての紙上相談の効用と読者全体にとっての紙上相談の効用という2側面から検討する。そのうえで、C-フレンズへの参加希望とその理由を尋ね、すでに活動しているメンバーの参加動機と活動状況とあわせて検討する。

## 方法

### 1. 予備調査

2003年2月中旬に、他の内容のアンケート調査を実施する際に、ピア・サポート活動(C-フレンズ)の認知について、ごく簡略な質問項目をいれて、4年生以上のクラスで尋ねた。「あなたはC-フレンズを知っていますか」との問いに対しては、各学年とも9割以上が「はい」と回答した(表1)。C-フレンズの存在については、かなり知られているようだ。

表1 C-フレンズの存在の認知

	4年生	5年生	6年生
はい	64	68	71
いいえ	7	5	6

しかし、その活動の認知度については(「C-フレンズがどのような活動をしているかを知っていますか」)、4年生で5割、5年生がやや高く7割弱、6年生は5割弱であり(表2)、C-フレンズの名前だけ知っているという児童も多いことがわかる。

表2 C-フレンズの活動内容認知度

	4年生	5年生	6年生
はい	36	50	37
いいえ	35	23	40

では、「C-フレンズが出している『小さなそうだん』のおたよりを読んでいますか?」との問いには、4年生は4人中3人、5年生は3人中2人、6年生は2人に一人が「はい」と回答しており(表3)、高学年の方が読んでいないようにうかがえる。

表3 『小さなそうだん』読んでいる?

	4年生	5年生	6年生
はい	53	48	42
いいえ	18	27	34

自由記述には、「とてもいい取り組みだと思う」、「みんなの悩みを聞いてくれて、すごく助かる。もっと積極的に活動してもよいのでは」という回答もある一方で「C

- フレンドはいない」「C-フレンドに相談しにくいのに、無理に相談を入れさせようとしている」などの意見もあった。

C-フレンドの活動内容を知らない児童もいること、知っているもその活動内容に対する評価が分かる可能性があることを考慮に入れて、本調査の実施・分析に臨んだ。

## 2. 本調査の調査協力者・時期・方法

調査時期：2003年2月下旬

調査協力者：鳥取大学教育地域科学部附属小学校4年生71人(男子27人,女子44人),5年生72人(男子34人,女子37人,不明1人),6年生73人(男子36人,女子37人)。全体で,216人(男子97人,女子119人)。無回答の用紙はなかった。欠席者以外は回答をしたことになる。よって,全児童数に対する回答比率は,4年生では約95%,5年生では約97%,6年生では約96%,全体では96%であった。実施方法：本調査の実施は,年度初めにPTCC委員会の年次計画の中に盛り込まれていたものである。クラス単位で実施。実施に要した時間はおよそ15分。

質問紙の最初に,「回答したくない問いについては,答えなくてもかまいません。また,全部答えたくない場合には,ひとつも回答を書かなくてもかまわないのですが,どうして答えたくないのか,教えていただくと幸いです」と記して,回答が義務ではないことを明示した。

## 3. 調査内容

先行研究(Naylor and Cowie,1999;池本,2001)を参考にしつつ検討を重ね,実施校の管理職の助言も得て,下記の項目について調査を行なうこととした。具体的な内容は,結果と考察において記す。なお,効果という語ではなく効用という語を用いるのは,相談者にとっての有用さを検討していることを強調するためである。

### 1) 紙上相談の効用

- ・ 相談者にとっての紙上相談の効用
  - 紙上相談利用者の感想
  - 紙上相談を利用しなかった理由
  - 紙上相談に相談したい内容としにくい内容
- ・ 読者全体にとっての紙上相談の効用
  - 実施直後と最近での評価の違い
  - いやがらせ抑止効果

### 2) C-フレンドへの参加希望とその理由

## 4. 集計及び分析の方針

集計および分析にあたっては,以下の点を前提とした。

まず,本調査は,標本調査からの推測統計に基づくものではなく,一つの学校での実践を一つのケースとして捉えて記述するために数量的な指標も用いるものである。よって,統計的検定を用いての分析は行わない。

また,たとえ小さな比率であっても,その少数の意見を尊重するため,実数のみで表示して考察する場合もある。

## 結果と考察

方法の「調査内容」の事項に即して,集計・分析結果を提示し,簡略に考察を加えた。

### 1. 紙上相談の効用

#### 1) 相談者にとっての紙上相談の効用

##### a. 紙上相談利用者の感想

「C-フレンドに手紙を出して相談したいと思ったことがある」うえに「実際に手紙を出した」ことがある場合,「相談してみたの感想や要望を聞かせてください」とお願いした。

まず,実際に手紙を出したと回答したのは,各学年とも女子のみであった。男子は,相談をしていないか,あるいは,相談したことを質問紙上で隠しているかどちらかである。

それぞれの回答を見てみると,まず,次のような回答が見られ,紙上相談ピア・サポートが一定の機能を果たしていることがうかがえる。

「ちょっと心がやすらかになって,気持ちがほっとした。(家旅にも話していっしょの気持ちになったけど)」(4年女子)

「わたしにもわかりやすくかいけつしてくれました！」(4年女子)

「いろいろなことを聞いてくれるし,言ってくれるので,とてもよかったです」(5年女子)

「それ以来きちんと友達とも仲よくなった！」(5年女子)

「C-フレンドの人が,やさしくはげましたり元気づけてくれて,そのいやがることをした友達も気づいてくれたのでうれしかった」(6年女子)

「自分のなやみが人にきいてもらえて,楽になった」(6年女子)

ただし、以下のような回答からは、  
相談に応じてもらえていない  
回答の内容が不十分である  
解決してもらえていない  
と  
思っている児童もいることがわかる。

「返事が帰ってこなかったのがショックだった」（4年女子）

「なにもそうだんにのってもらえなかった」（5年女子）

「具体的なアドバイスがない」（5年女子）

「もうちょっとくわしいアドバイスがよかった」（5年女子）

「友達とけんかしたときのことで、『私もそういうことがあった』ということは、あっても、どうということがということがあった方がいいと思った」（5年女子）

「べつにかいけつしてくれなかった」（5年女子）

また、「・出しにくかった。・友だちについての内容だったので、『あのそうなん、あんたがだしたんじゃないの?』といわれて少しいやだった。・少しすっきりした」（6年女子）という回答もあり、プライバシーへの配慮について、さらに細心の注意が必要であることがうかがえる。しかし、内容を全く誰のことが想像もできないものにするのが果たしていいことなのか問題もあり、相談への返答の仕方を工夫する必要があると思われる。

#### b. 紙上相談を利用しなかった理由

「いいえ」と回答された場合には「それはどうしてですか?」と尋ね、「相談する前に解決したから」「他の人に相談したから（それは誰ですか?）」「その他」からいずれかひとつを選んでもらった。

学年・性別の選択肢の回答数を表4に示した。

「他の人」は具体的には、4年生は「友だち」と「先生」、5年生は「友だち」「母親」「家族」であった。

表4 相談したいことをしなかった理由

	4年生		5年生		6年生	
	男	女	男	女	男	女
相談前解決	1	2	4		2	
他の人相談	1	3	1	2		
その他		3	1	3	1	2

「その他」の理由は、4年女子では、「相談しにくかったから」「手紙をほったらかしにしていたから」「そのことをわすれてしまう」。5年男子では「やっぱり人にはいえないと思ったから」。5年女子では「ひみつがバレそうだから」「先生に紙をとられたから」「前に、取りあげてもらっていないから」。6年男子では「相談しようと思っても、なかなか出すことができなかったから」。6年女子では、「出しにくかった」「人に言いたくない」であった。

#### c. 紙上相談に相談したい内容としにくい内容

まず、「あなたがC-フレンズに相談(そうなん)するとしたら、どのようなことなら相談したいと思いますか?(例:友だちと仲直りする方法)」と尋ねた。

4年生では、この例示にひきずられた可能性もあるが、この問への女子の回答者42人のうち29人(69%)が友だちに関することであった。しかし、男子の方は、友だちに関することは、この問への回答のあった23人中の7人(30%)にとどまった。

友だち関係の次には、家族に関すること(たとえば「お兄ちゃんと仲良くなる方法」「お母さんにうまくあやまる方法」)が、男子2人に女子4人。学習に関すること(たとえば、「あたまをよくする方法」(男子)、「発表する時、声が小さくならない方法」(女子))などがあった。

男子のその他の回答は、「ボール(サッカーボール)がなくなってさがしてもない」「んーない・・・(だれにも言わないようにしている)」「動物をうまくかう方法」「夜、犬がよくないてうるさいこと」などであった。女子のその他の回答は、「運動ができるようになりたいなど・・・?」「強気になれる方法」「つまらないときどんな遊びをすればいいのか」などであった。

いじめに関する4年生の記述は、男子1人、女子6人からあった。具体的には「いじめをなくす方法」「友達に、いじめられていること」「シカトされずにすむ方法」などである。

5年生では、男子は、記入のあった31人のうち、10人は特にないという記述であったが、11人が友だち関係に関するものであった。その他は、「先生をおだてて宿題をへらす方法」「先生のこと」「自分のこと」「さいきんふとった」「しょうらいのこと」「正しいおこづか

いの使い方」などであった。女子は、記入のあった36人のうち、11人は特にないという記述であったが、19人が友だち関係に関するものであった。その他は、「先生のこと」「好きな人に告白する方法」「こいの相談かな」「お金を無だ使いしない方法」などであった。

「いじめ」について記述した5年生は、男子3人、女子1人であった。また、女子に「友だちと仲直りする方法」という内容が4人あった。

6年生では、男子は、記入のあった23人のうち、15人は特にないという記述であったが、6人が友だち関係に関するものであった。その他は、「クラスのこと」「しょう来について」であった。女子は、記入のあった29人のうち、8人は特にないという記述であったが、14人が友だち関係に関するものであった。その他は、「校則に関する事」「人に(仕事をしない)仕事をさせる方法」「このごろムカツいている。どうするべきか。不景気な世の中でどう仕事をしていくべきか?今、私が大人になってリストラなどがなくなるにこみがあるか」「中学校について」「勉強のこととかです」「クセについて」「親のこと」「クラスについてのなやみ」であった。

「いじめ」という言葉を用いての6年生の記述は、男子にはなく、女子は1人であったが、男子に「いやがらせ」「ケンカなど」、女子に「ケンカについて」「いやがらせなどについて」という記述があった。「友だちと仲直りする方法」が男子に3人、女子に2人あった。

では、どのような内容は相談しにくいと考えているのだろうか。

「問1と逆に、「C-フレンズには相談しにくいなあ」と思うことがありませんか?」との問いに対し、「ある」「ない」「わからない」からの択一回答を求め、「ある」という回答の場合に「それはどのような悩みの場合ですか?」と重ねて尋ね、さらに、「そのような悩みは、誰に相談したいとおもいますか?」と尋ねた。

4年男子には、次のような回答があった。(以下、「C-フレンズには相談しにくい悩みの内容」「誰に相談したいか」という形式になっている。また、表現の誤りはそのままとしてある)

- ・「ぜんぶ(だれにもいいたくないの...)」
- 「母さん(親)」

4年女子には、次のような回答があった。

- ・「友だちにいやがらせをされたこと」「友だち(その人たちとは別の)」
  - ・「なやみよりも、ほかのことでしにくいことがあります。それは、最近の五・六年は、ウワサ話をよくするから、私のことも言われそうだからです」「家族・たよりになる友達」
  - ・「人にあまりきかれたくない友達かんけい」「お母さん、先生」
  - ・「先生のこと」「家の人」
  - ・「好きな人」「親ましい友だち」
  - ・「家族のことでなやみ その他もろもろ...」「とくに想だんしようとは思わない」
- 5年男子には、次のような回答があった。
- ・「友だちのこと」「する人はいない」
  - ・「自分の体について」「はずかしいから」
- 5年生女子では、次のような回答があった。
- ・「C-フレンズの活動をしている友達のことを相談したいし、ひみつがバレそうでこわいから」「他の友達」
  - ・「友達のこと(その人がCフレンズだから)」「家族」
  - ・「C-フレンズの人が友だちで、相だんの内容に出てきた人に教えるかもしれないから」「親 先生」
  - ・「だれにもいいたくない。なぜかは、友達に言われるから」
  - ・「人にみられるから」「母」
  - ・「先生のこと」「1人でかいけつする」
  - ・「学校でのこと」「家族」
  - ・「成績」「親や先生」
  - ・「月経、おりものとか」「お母さん、保健の先生」
  - ・「好きな人とか」「友達」
  - ・「好きな人のこと他...」「友達」
  - ・「いせいについて」「友だち(女の子)」
- また、大学生に相談したいという回答もあった。

6年男子には、次のような回答があった。

- ・「友達との関わり」「他の友達」
  - ・「学校の人たちに知られたくないような悩み事」「先生や家族」
  - ・「プライベートな悩み」「親」
  - ・「すべての悩みを相談したくない」「友達」
  - ・「知らない人に相談できない。あまりなやみなどない。」
- 6年女子では、次のような回答があった。
- ・「学校内の人で顔を知っているから」「信らいいのある人」
  - ・「赤の他人だし。男の人が多いし?」「友

- 達 犬」
- ・「友だちのこととか、先生のこととか…」
  - ・「友達関係」
  - ・「友達関係」「家族・友達」
  - ・「内容じゃなくて、あまり、相談したくない」「友達」
  - ・「体のこととか(生理とか、いままでとはちがってくること)」「お母さん。大人の人(?)」
  - ・「体のこととか」「親・同じなやみをもつ人・親らいてる友達」
  - ・「相だんしても、どうせありきたりの返答しかないだろうから」

人間関係にかかわる悩みについては、「友だち」「家族」「先生」が、それぞれ悩みのもとにもなり、相談先にもなっている。友だちに関する悩みを別の友だちに相談するという記述はあるが、家族についての悩みを別の家族に、先生についての悩みを別の先生に、という記述は今回の調査では無かった。また、少数ではあるが、相談しないという回答があり、本当に深刻な悩みになった場合にはどうするのか心配である。

C-フレンズをしている友だちのことを相談しにくいのは、まさにこの相談システムの回避しがたい問題であろう。附属小学校での紙上相談ピア・サポートでは、個々の回答を誰が書いたのかはわからないが、誰が活動に関わっているのかはわかってしまっている。学校の規模が一学年2クラスしかないためと、C-フレンズが昼休みに集まって活動しているためである。誰がC-フレンズなのか特定できることは、このように、C-フレンズのメンバーが関わっている相談ごとを持ち掛けなくて済むためには必要なかもしれない。

2) 読者全体にとっての紙上相談の効用

a. 実施直後と最近での評価の違い

「C-フレンズが活動を始めた頃、あなたはC-フレンズについて、どのように思っていましたか」という問いと、「C-フレンズについて、最近、あなたはどのように思っていますか」という問いについて、「いいことだと思った」「自分には関係ないことだと思った」「なんかいやな感じと思った」「その他」からの択一式での回答を求めた。

この2つの問に対する回答を、学年別にクロス集計した結果が表5である。

表5 実施直後と最近での評価の違い  
(単位:人)

4年生	いい	関係ない	いやな	その他	計
いい	35	8	0	1	44
関係ない	6	12	1	1	20
いやな	0	0	1	0	1
その他	3	0	0	1	4
計	44	20	2	3	69
5年生	いい	関係ない	いやな	その他	計
いい	25	3	2	4	34
関係ない	4	11	2	1	18
いやな	1	2	3	0	6
その他	6	0	2	5	13
計	36	16	9	10	71
6年生	いい	関係ない	いやな	その他	計
いい	12	5	1	2	20
関係ない	7	23	3	2	35
いやな	0	3	3	0	6
その他	2	4	1	5	12
計	21	35	8	9	73
全体	いい	関係ない	いやな	その他	計
いい	72	16	3	7	98
関係ない	17	46	6	4	73
いやな	1	5	7	0	13
その他	11	4	3	11	29
計	101	71	19	22	213

この結果について特記すべき点は、まず、実施直後も最近も、C-フレンズの活動を「いいことだと思った」とする回答が、4年生では有効回答(以下同様)69人中35人(約51%)、5年生では71人中25人(約35%)、6年生では73人中12人(約16%)と、学年が上の方が低い比率になっていることである。

これは、子どもたちの社会的関係の発達に即して、おとなやおとなの支援する制度に相談をするのではなく、友達同士で相談をすることが中心になってくるためかもしれない。あるいは、5・6年生の投書の内容に紙上相談で扱えるレベルのものではないものが多いことから推察すると、紙上相談の対応能力の限界を察知しての回答なのかもしれない。

次に、どの学年にも共通していることとして、実施直後は「いいことだと思った」が、最近では「自分には関係ないことだと思った」「なんかいやな感じと思った」という回答(表中の二重線枠で囲った部分)が、その逆の回答(表中の太線枠で囲った部分)と、ほぼ同数である

ことがあげられる。

このことから、C-フレンズの活動のなかがみ  
がわかっていくことで、「わかったらいいこと  
と思えてきた」場合もあれば、「わかったら期  
待と違っていい」場合もあったであろうことが  
推察される。

さらに、実施直後は「いいことだと思った」  
が、最近では「なんかいやな感じと思った」とい  
う回答について詳細にみると、5年生の女  
子2人と6年生の男子一人の回答であった。5  
年生女子の一方は、「C-フレンズの活動をし  
ている友達のことを相談したいし、ひみつがバ  
レそうでこわいから」と別の記述欄に書いてお  
り、また、もう一方の女子は、C-フレンズに相  
談したが「なにもそうだんにのってもらえな  
かった」と、記述している。C-フレンズをし  
ている友人のことでの問題や、相談にのって  
もらえていないと感じたことで、活動への評  
価が下がったようだ。6年生の男子の回答は、  
自由記述がほとんどなく、この回答の変化の  
理由を推察することは困難であった。

さいごに、「その他」の内容についてまとめ  
る。

実施直後については、「あんまり知らなかつ  
た」（4年女子）、「活動を始めたことすらし  
らなかつた」（5年男子）と同様の内容の回  
答が7人、「どんな活動をしているのか、よく  
わからなかつた」（6年女子）という回答が  
8人、「べつになんとも思わなかつた」（4年  
女子）というような回答が8人からあつた。  
このように、C-フレンズの活動の詳しい内  
容が知られていないことが理由と思われる  
ものが「その他」の回答のほとんどを占めて  
いたが、比較的肯定的と思われる内容の回  
答もあつた。「やってもいいこと」（4年  
男子）、「よければつかおう」（5年男子）  
、「少しは人のやくにたつ  
のではないかな」（5年女子）、「べつに  
いいと思った」（5年性別不明）、「そう  
か、そうかと思った」（6年男子）、「お  
もしろそうな活動だなと思った」（6年  
女子）などである。

最近でも、実施直後と同様に、「今はじ  
めてしまったからわからない」（5年男子）  
という回答もある。また、「何をやっている  
のかわからない」（6年女子）という回答  
が7人、「いいと思わないし、いやともお  
もわない」（6年男子）、「別に何も思わ  
ない」（5年女子）という内容と同様の回  
答が6人あり、「なやみがないのであまり  
関係ないと思う」（4年男子）という回  
答もあつた。実施直後と違うのは、次の  
ような否定的な回答である。「別になや  
みをか

いけつしてもくれない」（5年女子）、「出  
す人がいないから意味がない」（5年女  
子）などの内容である。

紙上相談で結果的に悩みが解決される  
場合もあるが、それが事態への介入的な  
実践ではない以上、「解決してくれる」シ  
ステムと思われる。また、相談を出す  
人がごく少数であっても、その悩みを  
共有し、同様の悩みへのヒントを提  
供していくシステムであることが理  
解されていない場合もあることが推  
察された。

もちろん、最近においても肯定的な  
回答があり、「大変そうな仕事」（5年  
男子）、「少しいいと思う」（5年女  
子）、「とっても×1000いいとおも  
う」（5年性別不明）、「もう少し  
いろいろな活動をしてみた方がいい  
と思う」（6年女子）と、活動内容  
への評価や期待がこもった記述もあ  
つた。

#### b. いやがらせ抑止効果

いじめや、そのごく初期の段階と思  
われるいやがらせへの早期対応は、  
早期の発見あるいは相談によって可  
能になる。また、いじめやいやが  
らせをする側にとっては、された  
相手や目撃者が誰かに相談をする  
かどうかということについての見  
通し（知識というよりも信念であ  
る）が、行為抑止の一要因となり  
うる。そこで、紙上相談ピア・サ  
ポートが、いやがらせをされた  
場合の相談先として選ばれるかど  
うか、そして、いやがらせをさ  
れた者やそれを見た者の相談先  
として選ばれると考えるかどう  
かを尋ねることにした。また、  
本調査では、いじめに関して  
ではなく、いやがらせとした。そ  
れは、紙上相談ピア・サポート  
はごく初期段階の軽微ないじめ  
への対処は可能であっても、深  
刻化した場合には紙上相談だけ  
での対処は困難であるため、  
いやがらせと記述した方が適切  
と思われるためである。

まず、紙上相談ピア・サポートが  
いやがらせをされた場合の相談  
先として選ばれるかどうかを  
検討した。

「もしも、だれかにいやなことを  
されたら、私は 〇〇に相談  
したい」の「〇〇」の部分に、  
友だち、C-フレンズ、先生、  
家族のいずれかを入れた文章  
それぞれについて、「そう思う」  
、「少しそう思う」、「どちら  
ともいえない」、「あまり  
そう思わない」、「全く  
そう思わない」の5件から  
ひとつを選択する形式で尋  
ねた。「そう思う」から順に、  
4点、3点、2点、1点、0



点を与え、相談相手ごとに学年別平均点を求め、結果を図2に示した。

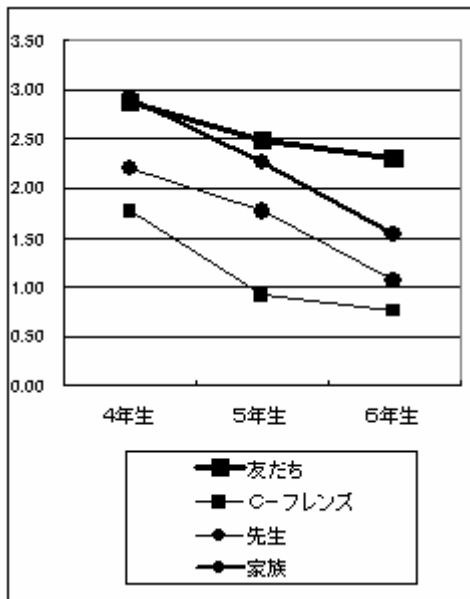


図2 いやがらせについて相談したい相手 (点数が高い方が「したい」側)

図からわかることは、学年が上の方がいずれの相手も「相談したい相手」として選ぶことが少なくなっていることと、一番相談できそうな相手が友人であるということである。また、C-フレンズは、相談の選択肢の一つにはなっていないと言えようか。

そのうえで、ピア・サポートの本来の目的である、「友だちに相談しにくい人が相談できる」ようになっていくかどうかの問題になる。

「もしも、だれかにいやなことをされたら、私は友だちに相談したい」とは「全く思わない」と回答している場合に、C-フレンズや先生や家族に対しては相談できるのかどうかを検討した。「友だち」「C-フレンズ」「先生」「家族」の4者について順番に、「相談したいと全く思わない」場合を「×」、「あまりそう思わない」場合を「○」、それ以外を「□」で表記する。

4年生は、男子に「××××」と「××」が各1人、女子に「××」と「××○○」が各1人であった。女子の前者は「友だちよりもC-フレンズの方が少し相談しやすいようだ。

5年生では、男子で「××××」が3人、「×××○」が1人、女子で「××××」が3人、「×××○」「×××○」「××○○」が各1人であった。自分で対処できるようになるためでもあるかもしれないが、この理由についても

詳しく尋ねる必要があるかもしれない。

6年生では、男女差が大きかった。男子では「××××」が10人と「×××○」が1人であったが、女子には、友だちに相談しようと全く思わないという回答は無かった。4・5年生ではあまり男女差がなかったことから、これは、この学年のさまざまな事情が関わっているのではないかと思われる。

次に、紙上相談ピア・サポートがいやがらせをされた者やそれを見た者の相談先として選ばれようと、児童が考えるかどうかを検討した。

いやがらせをされた場合の自分の相談先に関する問いと同様に、いやがらせをした相手やそれを見た人の相談先の予想について尋ねた。

「もしも自分がだれかに、いやがることをしたら、その相手が に相談するかもしれない」という文章と、「もしも自分がだれかに、いやがることをしたら、それを見ていた人が に相談するかもしれない」という文章についても回答を依頼した。

両者とも、「 」の部分に、友だち、C-フレンズ、先生、家族のいずれかを入れた文章それぞれについて、「そう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5件からひとつを選択する形式にした。「そう思う」から順に、4点、3点、2点、1点、0点を与え、相談相手ごとに学年別平均点を求め、結果を図3と図4に示した。

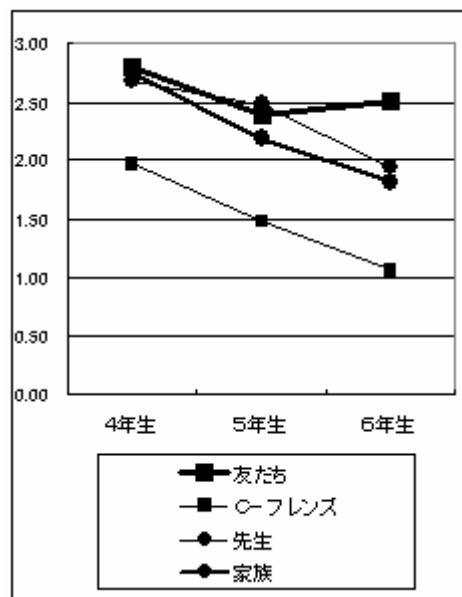


図3 いやがらせされた人が相談しそうな相手 (点数が高い方が「しそうな」側)

全体的に、上の学年で「相談しよう」という回答が少なくなっているが、これは、図2の「相談したい」相手に関する結果と表裏をなしているものと思われる。C-フレンズに相談しようとする回答も少ないながらもあったが、他の3者よりも選ばれる度合いは少なかった。

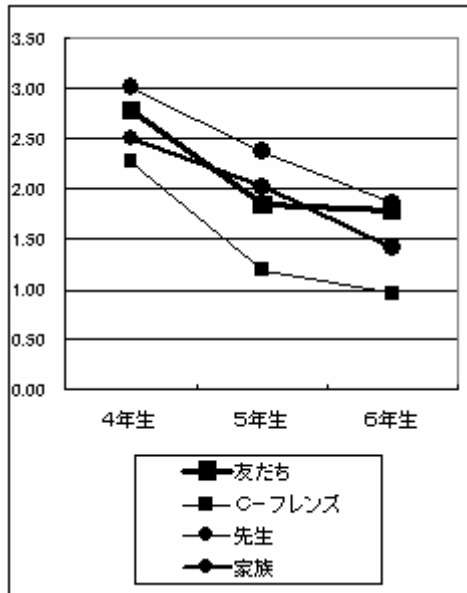


図4 いやがらせされているのを見た人が相談しような相手  
(点数が高い方が「しそうな」側)

さて、ここでも、個々の回答についての詳細な検討をした。

いやがらせされた人が、友だちには「相談しようもない」(「相談するかもしれない」とは「あまりそう思わない」あるいは「全くそう思わない」のいずれかを選んだ場合)がC-フレンズには「相談するかもしれない」(「相談するかもしれない」について「そう思う」あるいは「少しそう思う」のいずれかを選んだ場合)と回答したのは、4年女子1名だけであった。同じく、いやがらせされているのを見た人が、友だちには「相談しようもない」がC-フレンズには「相談するかもしれない」と回答したのは、5年男子1名と6年女子1名であった。

この3名の回答を無視できるものとは、筆者らは考えない。この児童にとって、C-フレンズの存在が、友だち以上に、誰かの相談先として認知されているならば、開始後間もない活動が、なんらかの抑止効果を持ち始めていることの現れと考えるからである。この指標に関しては、今後の活動の広がりの中かでどのように変化するかを縦断的に調べる必要がある。

一方で気になるのは、友だち、C-フレンズ、

先生、家族のいずれについても、いやがらせされた人が「相談しようもない」との回答であり、4年男子1名、5年男子3名、5年女子5名、6年男子9名、6年女子2名であった。また、いやがらせされているのを見た人が、いずれにも「相談しようもない」との回答は、4年男子1名、5年男子6名、5年女子3名、6年男子11名、6年女子7名であった。このような信念については、いじめの背景の心理の研究として、精緻に検討していく必要があると思われる。

## 2. C-フレンズへの参加希望とその理由

「あなたは、来年、C-フレンズの活動(小学校6年生は、中学校での同じような活動)に参加したいと思いますか」との問いに対し、「はい」「いいえ」「わからない」から択一での回答を求め、さらに「その理由は何ですか」と尋ねた。

C-フレンズの活動に参加したいと表明したのは、男子は4年生の3人のみであった。女子は、4年生14人、5年生4人、6年生3人であった。

理由は、4年男子は「たくさんの人にそうだんにしてもらいたから」「1人のなやみをかいけつしてあげたいから」。

4年女子は、「自分を助けてくれたうれしさを返したいから(相談の事)」「ぎゃくに、みんなの相だんをかいけつしてあげたいから」というような返礼的な記述、「私も人のなやみをかいけつする手伝いをしたいから」「みんなの心のきずをかいけつしてあげられるから」「なやんでいる人を助けてあげられたらいいなあと思うから」「私も、5、6年生がしているように、人のなやみをかいけつしたあげたいから」「みんなの役に立ちたいから」「他の人のなやみをかいけつできる」「いろんな人の相談にのってあげるのはいいことだと思うから」などの「何かをしてあげたい」という内容を含む記述、「ずっとやってみたいと思っていたから。人の相だんにのってあげたいから」「みんなのなやみをかいけつしていつすかつとした気分になりたい!」「相談をされるのが好きだから」などの自分の気持ちを記述したものがあつた。

5年女子は、「友達の相談にのってあげたいから」「たのしそうだから」「そうだんで答え

を見つける自信がほしいから」「いいことだと思ふから」という記述であった。

6年女子は、「今も入っているけど、だれかな『心の支え』になりたいし、人のためになることがしたいから」「6年生で入ってみて、用事などで行けないことが多かったけど、大切なことだと思ふから。(子どもどうしの方が良いこともあるとおもうから。)」 「いろんな人の相談にのって、解決(?)できるとなんか気持ちいいから」であった。

5・6年生は、現在のC-フレンズの活動状況を身近に見ているので、どの程度忙しく、また、昼休憩に遊べないなどの理由から「たいへんそう」と感じる児童が多いのかもしれない。

このような記述で着目したいのは、自分が相談にのってもらえて嬉しかった経験への返礼として参加したいという記述、誰かに何かをしてあげたいという内容の記述、そして自尊感情にかかわる記述などがあることである。この3つは、排反的なものではないかもしれないが、仮に「返礼」「貢献」「自尊感情」に関する記述とし、後ほど詳しく考察したい。

### 3. その他の自由記述より

「今までの質問に無いことで、C-フレンズについて書きたいことがありましたら、書いてください」と尋ね、自由記述での回答を求めた。

ほとんどが「なし」という回答であったが、比較的肯定的な評価、要望等、否定的な評価なども寄せられていた。以下、まとめて提示するが、児童の表記の誤りはそのままとしてある。

「C-フレンズは、すっごい良い活動だと思ふ。けど、手紙を出す人とかが少ないから、もっとえんりょうせずつに出した方がいいと思ふ。」(6年女子)「相談はすこしすらいけどももうすこししていきたい」(4年男子)「大変な仕事だと思ふ。」(5年男子)という記述は、比較的肯定的な評価や期待が前提にあると思われる。

要望としては、「手紙(小さな相談)に心理テストとかを入れてほしい」(5年女子)という紙上の内容に関するもの、「Cフレンズの手帳の中が見てみたい。」(5年女子)と、活動内容への興味関心が示されたもの、「活動をもっと全員にわかりやすくしてほしい」(6年男子)との、活動内容をあまり知らされていないと感じての要望があった。

また、質問に関しては、「そのC-フレンズの人がそうだししたいことがあるときは、どうするんですか?」(4年女子)というシステムに関するもの、相談する立場からの、「C-フレンズの人達は、何のしつ問でも、きちんと答えてくれるんですか?手紙を出してみたいとは思ふけど、他人なので心配で言えない。」(4年女子)、「C-フレンズの人たちは、本当に何でも答えてくれるんですか。もし、答えてくれるのなら、何枚でもなやみを相談したいと思っています。」(4年女子)という質問などがあつた。

システム改善への具体的提案もあつた。「少し相談しにくい。たとえば、面とむかって相談したりすることか……。おねがいする人はペンネームで手紙をだして、手紙で返す。(なにかの中に入れてさんとかいてあつたら自分のって分かるとおもう)そしたら、だれかわからなくていいのでは?」(6年女子)という意見は、考慮に値すると思われる。

また、いくつか具体的な質問も寄せられており、このような全員配布のアンケートが、紙上相談への質問を寄せる機会になることもうかがえる。

## 総合的考察

紙上相談の効用およびC-フレンズへの参加動機に関する検討を、主な結果から考察し、最後に紙上相談システムの改善ポイントをまとめる。

### 1. 紙上相談の効用

まず、相談者にとっての紙上相談の効用、その次に、読者全体にとっての紙上相談の効用を検討する。

#### 1) 相談者にとっての紙上相談の効用

まず、実際に相談をした児童の感想からは、気持ちが楽になったり、また、結果的に問題の解決に結びついたこともあつたりしたことが示されており、一定の効用はあつたことがうかがえる。

ただし、相談に応じてもらえていない、回答の内容が不十分である、あるいは解決してもらえていないという感想も寄せられており、改善の余地もあることがうかがえる。

「相談に応じてもらえていない」ということは、その相談の質問の意図がわかりにくかつた

り、紙上で扱うには不適切な内容の相談であったりしたためと推察される。今後、詳細な再質問（紙上相談への再相談、あるいは電話やメールでの対個人返答相談）の促しや紙上相談では扱えない理由を、できる範囲で紙上に掲載することで、対応できると思われる。

「回答の内容が不十分である」という意見への対応としては、回答時に「もしもこの回答で不十分と思われる場合には、再度質問してください」などの促しも必要かもしれないが、紙上相談には回答の丁寧さに関して限界があることも周知しておく必要があると思われる。

「解決してもらえていない」という意見に対しても、結果的に解決することはあっても、事態への介入を行うわけではない紙上相談によって解決がもたらされることが困難であることを知らせる必要がある。

次に、相談しようと思ったが結局相談しなかったという場合があり、紙上相談のシステムの効用を高めるためにその理由を検討する必要がある。相談しなかった理由の約6割は、「相談する前に解決したから」「他の人に相談したから」であり、このような回答のみであるならば問題はないであろう。しかしながら、「その他」のなかに、「出しにくかった」等の回答も見られた。今回の調査の実施において、最後にもうけた自由記述欄に相談が記入されていることがあったが、このような全員配布・全員回収の機会を設けることで、幾分かは相談を出しやすくなるかもしれない。

さらには、紙上相談のみが唯一の相談先ではなく、紙上相談に相談したい悩みと相談しにくい悩みがあることが具体的に示された。紙上相談には相談しにくい悩みの相談先が十分に準備されているのかを検討する必要があることをうかがわせた。

紙上相談ピア・サポート（C-フレンズ）に相談したい内容として、いじめやいやがらせに関する記述がすべての各学年にあり、もしもいじめがあった場合の相談先の一つとして考えられていることが示唆される。これも相談者にとっての、潜在的な効用と考える。

## 2) 読者全体にとっての紙上相談の効用

相談者にとっての紙上相談の効用について検討する際に、いじめの被害者の側への効用についても検討したが（もちろん、いじめの加害者側が相談するということもありうるが、まれ

であろうと推定している）、読者全体の中には、いじめやいやがらせの加害者や傍観者が含まれている可能性が高く、自分がかかわっている可能性の高いいじめの相談に接することで、なんらかの影響を受けて、行動が変化する可能性がある。これは、加害者や傍観者への効果という言い方が適切かもしれない。もちろん、プラスの効果だけではなく、相談の事実を「ちくり」ととらえていじめがエスカレートする可能性がある。そのような事態を避けるためにも、きわめて初期の段階ではないいじめに関しては、対個人返答相談で対処すべきかもしれない。

さて、そのような効果があると考えられるため、本調査では、いじめの初期段階と重なる概念であると思われるいやがらせについての抑止効果を検討するための項目をもちこんだ。また、C-フレンズの活動全般への実施直後の評価についての回顧的な回答を求め、最近の評価と比較した。

しかしながら、実施直後と最近での評価の違いに関しては、肯定的方向への変化と否定的方向への変化がほぼ同数であった。いやがらせ抑止効果に関しても、一定の効用が認められたものの、顕著な現れ方とは言い難い。しかしこれらのことは、C-フレンズの活動内容に関する広報をさらに行ったり、あるいは、友だちや先生や家族以外の相談先として意味を持つために、中学生への相談も可能にするなどの工夫をしたりすることで、改善できるのではないかとと思われる。

## 2.C-フレンズへの参加動機

C-フレンズへの参加希望についての回答において、自分が相談にのってもらえて嬉しかった経験への返礼として参加したいという記述、誰かに何かをしてあげたいという内容の記述、そして自尊感情にかかわる記述が見られた。この「返礼」「貢献」「自尊感情」に関して、すでに活動をしているC-フレンズの活動状況と照らし合わせて、検討しておきたい。

まず、2002年度のC-フレンズの活動状況を簡単にまとめておくと、C-フレンズのメンバーには、自分が学校の中で「何かの役に立ちたい」という意識で参加している児童が多く、また、自分の「居場所」「役割」と位置づけている場合もある。忙しくたいへんながらも「やりがいのあること」「楽しい活動」とのコメントが記録や観察からうかがわれる。

男子は従来から参加意思のある児童が少な

かったが、今年度は1人の男子の呼びかけで計6人がメンバーとなり積極的に参加している。

4年生にとっては、C-フレンズは「特別な存在(カッコいい,みんなの力になっているなど)」という期待感が大きい。しかし、華やかな部分(表に出る部分)のみを見ているので、5年生になって実際の活動に参加してみると、その量的・質的な作業内容から「思っていたよりたいへん」「楽しいばかりではない」という現実を知り、欠席がちになるメンバーもいる。

C-フレンズは出席を義務づけてはいないので、1つのセッション(相談回答までの一連の作業,ほぼ3~4回の過程)における出席状況は、およそ27名中20名前後である。その中でほぼ全回出席するのは10名前後であるが、回答だけではなく、カットやイラストなど紙面づくりに何らかの形で参加している。

さて、2002年度のC-フレンズのメンバー(27名)の初回の参加動機ごとに、開始から1年後の活動状況を比較してみた。

自分が助けられたことを、今度は自分がやってみたいと思った。

6年生 2名中2名が活動中  
何をみんなが悩んでいるかを知って、自分も一緒に考えたいと思った。

6年生 2名中2名が活動中  
5年生 1名中1名が活動中  
人の悩みを解決したい、役に立ちたいと思った。

6年生 6名中4名が活動中  
5年生 9名中7名が活動中  
興味があった。  
6年生 2名中0名(活動していない)  
友だちに誘われた  
5年生 5名中5名が活動中

うち、の5名との5年生1名が男子で、その他はすべて女子である。

今年度の結果だけから一般化することはできないが、当初の参加動機が、その後の活動状況に大きな違いをもたらす可能性があることに留意しておく必要がある。それは、この参加動機の記述の背景に、サポート活動に何を期待しているのか、活動の趣旨をどの程度理解しているのか、の違いがあり、そのために理想と現実のギャップが様々になり、活動状況にも違いが出るのではないかと考えられる。

当初の参加動機が、単なる興味による場合や、「役に立ちたい」といったものである場合

に、活動が続かない可能性があることを考慮するとともに、「役に立ちたい」という動機についてみつめる機会を提供することも検討の必要があろう。

また、児童の参加動機は、活動に参加する過程において変化することも考えられる。その変化をたどり、参加状況との関連を見ていくことも必要かもしれない。

### 3. 紙上相談システムの改善ポイント

本調査の結果に基づいて、下記のような改善ポイントが示された。

#### 1) 活動内容の広報

すべての相談に回答はできないことを周知する。また、C-フレンズの活動全般をもう少し詳しく紹介し、より敷居の低い相談システムにする。

#### 2) 小学生の質問への中学生による回答

相談者の匿名性をより確保するためにも、また、「経験をしていないことは回答しにくい」というピア・サポーターの意見(本調査とは別の機会における聞き取り)に対応するためにも、場合によっては小学生の質問に中学生や教員が回答することも考えられる。そのために、相談用紙のフォーマットを作成し、そこに誰に回答してほしいのかを選択できる欄を設けてもよいかもしれない。

#### 3) 対個人返答相談による回答

紙上での回答が困難あるいは不適切と思われる場合への対処法を工夫する。個人宛に返すためには、全くの匿名というわけにはいかない。たとえば、相談を寄せるときにペンネームと暗証番号も記入し、開けているところを誰かに見られる可能性の低い場所(お手洗いの個室?!)に設置された返答箱に自分のペンネームが貼られていたら、箱の鍵を自分が書いた暗証番号で開ける、という方法も一案である。

先述の相談用紙のフォーマットに、対個人返答と対コミュニティ返答のいずれを希望するのかを記入する欄を設けてもよいと思われる。

#### 4) 相談提出の機会の保障

本調査のようなアンケート実施の機会に、相談を記入できる項目を準備する。

#### 5) C-フレンズへのフィードバック

本調査の結果をまとめる段階で、C-フレンズのメンバーに、相談者の「使ってみての感想」を伝えた(否定的な内容については、運営するおとなの責任や改善策についても触れた)。今までにそのような機会はなく、喜んでいようであった。さまざまな方法でのC-フレンズへのフィードバックを検討してもよいのではないだろうか。

(謝辞)調査にご協力くださった鳥取大学教育地域科学部附属小学校の教職員並びに児童の皆さまに心より感謝申し上げます。

また、本論文を、田中祐次先生のご退官を記念しての論文集に掲載していただけるということ、を、光栄に存じます。

田中先生は、平成15年2月20日に開催された、大学間共同遠隔講義「教育臨床」の2002年度を締めくくる講義において「学級心理学の新しい定義」として「学級を個を社会化する場としてとらえ、これを効果的に達成する事を目的とし、集団心理学的観点から学級を分析し、課題を設定してその解決のために工夫を重ねる教育実践をいう」と示されました。本実践は学校が単位ですが、「工夫を重ねる教育実践」への貢献の志を引き継いで研究を重ねてまいる決意です。

## 文 献

Cowie, H. and Wallace, P. (2000) Peer Support in Action. London: Sage.

池本しおり 2001 ピア・サポートを高等学校に取り入れるための実践的研究。岡山県教育センター研究紀要, 第228号, 1-33.

河田史宝 2000 生徒保健委員会活動におけるピア・カウンセリングの実際 - 紙上相談を中心に - . 第48回石川県学校保健研究大会紀要, 20-21.

河田史宝 1999 ピア・カウンセリングの実際 生徒保健委員会活動の一環として. 研究集録(日本教育大学協会養護教諭部門全国国立大学附属学校連盟 養護教諭部会第34回研究協議会並びに総会)

松田満理子 2000 ピア・サポートを生かした異学年交流(特集 いま、思いやりを学ぶ 思いやり行動を支援する技法). 『児童心理』金子書房, 54(8), 47-52.

森定薫 2002 単位制・定時制高校における特別な教育的ニーズを有する生徒へのピア・サ

ポートの実践 - 当事者がピア・サポーターに成長する可能性を探る - . 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第26集, 78-86.

Naylor, P. and Cowie, H. (1999) The effectiveness of peer support systems in challenging school bullying: the perspectives and experiences of teachers and pupils, *Journal of Adolescence*, 22, 3, 467-479.

Sharp, S. and Cowie, H. (1998) *Counselling and Supporting Children in Distress. London: Sage.*

戸田有一 2001 学校におけるピア・サポート実践の展開と課題 - 紙上相談とオンライン・ピア・サポート・ネット - 鳥取大学教育地域科学部紀要(教育・人文科学), 第2巻第2号, 59-75.

吉田ひろみ・附属小学校 PTCC 委員会・戸田有一 2001 附属小学校 PTCC 委員会の活動の現状と展望 鳥取大学教育地域科学部教育実践指導センター研究年報第10号, 29-31.

西海巡・戸田有一 2002 技能連携校におけるピア・サポート実践 鳥取大学教育地域科学部教育実践総合センター研究年報第11号, 67-71.

西海巡・吉田ひろみ・太田三葉子 2003(印刷中) ピア・サポート・メンタルフレンド・教育相談の統合的実践 - 教育地域科学部附属小中学校と教育実践総合センターの連携のもとで - 鳥取大学教育地域科学部教育実践総合センター研究年報第12号

執筆の分担: 実践の内容に関する記述(問題と目的の2.の前半と総合的考察の2.)は第二著者が担当し、予備調査の実施と記述(方法の1.)は、第三著者が担当した。その他の部分は第一著者が執筆し、第二著者と第三著者の修正を経た。

本研究に関するお問い合わせは、

戸田有一 ( [toda@cc.osaka-kyoiku.ac.jp](mailto:toda@cc.osaka-kyoiku.ac.jp) )  
まで電子メールにてお送りください。